

上村清雄先生を送る

池 田 忍

上村清雄先生は、2017年10月17日に逝去されました。10月10日がお誕生日、満65歳を迎えられたばかりでした。銀杏が落ち始め、例年よりも早い秋の訪れを感じる西千葉のキャンパスに、活気が戻る頃。上村先生は、後期開講の講義や演習を始め、オムニバスの授業のガイダンスに現れて、いつもの通り笑顔で、そしてユーモアをたたえた口調で学生たちを学びの楽しさに誘いました。振り返ると、療養中のお身体はさぞお辛かったことだろうと、胸が苦しくなります。けれども他方で、逝かれる前週まで教壇に立ち、院生や学生の研究相談に応じ、研究助成の推薦書を書くなど、お仕事に向かわれるその姿は実に自然体でした。病状が予断を許さないことを、ご自身が一番よくご存じていらしたことでしょう。それでも、そうせずにはいられないというきっぱりとした態度で、いつものように、自分らしく過ごされる姿が今も脳裏に浮かぶのです。

逝去の報を受けて間もなく、私は、上村先生が監修に携われた特別展「レオナルド×ミケランジェロ」展の巡回先美術館の学芸員の方から電話を頂戴しました。先生はご自身がつとめる予定であった講演会のことを気にかけて、入院先から連絡を入れられたそうです。突然の訃報が信じられない、といった口調でした。また、奥さまに伺ったところ、病床にあってなお *The Burlington Magazine* を紐解き、メールや手帖のスケジュールを確認されていたそうです。

傍らで、家庭人としての先生はお幸せでした。イタリア美術が専門の上村先生に対し、ドイツがご専門と分野こそ違え、奥さまの亜弓さんとは、欧州や国内での見学や作品調査をご一緒し、研究面でも楽しみや喜びを深く分かち合われました。仲睦まじいご様子を、学会などの場で幾度となく拝見/目撃しています。結婚生活は、三十一年に及ばれたそうです。その後半は、上

村先生が千葉大学、亜弓さんが金沢美術工芸大学と勤務地を異にしましたが、亜弓さんによれば、ご夫婦での旅行の際にはしばしば現地集合もあったそうで、「一緒に暮らしていれば知ることのなかった“待ち合わせ”という旅の醍醐味を二人で味わうこともできた」とのこと。羨ましい限りです。上村先生は、ユーモアの人であると共に、含羞の人でしたから、多くを語られませんでした。同じ研究者の道に進まれた妹さんや陶芸家の弟さんと共に暖かなご家庭で成長され、繊細で鋭敏な感性を育まれたと拝察します。ご家族とは、最後の短い入院の病床で、穏やかな会話を交わす時を過ごされたと言いました。

さて、美術史家としての上村清雄氏は、イタリア美術を中心に彫刻と絵画を主たる研究対象とし、各時代を代表する造形作品が達成した表現の特徴を、芸術家とその工房の系譜や交流、パトロンとの関係、芸術を育んだ都市の歴史的環境といった観点から探究してられました。あえて大きく二つに分けるならば、第1の領域は、14世紀から16世紀にかけて、いわゆるルネサンス期を中心に、先立つゴシック、後続のマニエリスム芸術を視野に収め、シエナ、フィレンツェ、ローマ（教皇庁）といった都市に育まれた芸術作品を対象とする研究です。この領域のご研究の成果の代表作が、ルネサンスの三大巨匠のひとりとして著名でありながら、日本では研究が少ないラファエロ、そして、その弟子のジュリオ・ロマーノの代表作を詳細に検討する単著『ラファエッロとジュリオ・ロマーノ「署名の間」から「プシュケの間」へー』（ありな書房、2008年）です。ラファエロによるヴァチカーノ宮殿内スタンツェ（教皇の諸間）を、一括して論じるのではなく、各間の内部装飾の進行とともに、彼の芸術に大きな変化がもたらされたことを、丁寧な画面分析と制作過程の検討を通じて指摘し、さらにラファエロ芸術の変化がジュリオ芸術に継承されたことを、二人が手がけた同主題の壁画の比較検討から論じました。本書は、両者を対照しながらルネサンス芸術からマニエリスム芸術への転換を論じる、邦語研究でははじめての試みでした。

また、上村氏は、従来中世のゴシック文化の残滓を残す都市として特徴づけられてきたイタリア中部のシエナのルネサンス期彫刻に対し、ひときわ深い関心と愛情を注がれました。若き日に留学先としてシエナ大学大学院（考

古学美術史研究科)を選び、1981年10月から1986年11月まで、修士課程を修了されるまでの5年の歳月を学んでいます。その後も幾度となく現地調査を実施し、イタリアをはじめ、近年の国際的な研究状況を踏まえた上で、異なる傾向を持つ複数の彫刻家の表現を詳細に比較、様式変化を検討し、都市を越えた芸術表現の影響関係や工房経営の実態、パトロンとの関係に迫り、成果を公刊されました。

第2の領域は、イタリア近現代彫刻研究です。近代における彫刻表現の新たな展開を、古代以来の伝統やヨーロッパ美術の新潮流への参照といった観点から検討し、背後の政治・社会状況との関わりを考察して成果を上げました。これらの取り組みは、上村氏が千葉大学着任以前に、群馬県立近代美術館に学芸員として在籍し、展覧会企画と展示を契機に着手、深めた研究テーマです。イタリアの近現代彫刻は、古代やルネサンス期のそれと比較すると日本に紹介される機会は多くありません。そのような状況下で、氏の研究は、伝統の創造や継承が近代イタリアの芸術家によって自覚的に試みられた事実を明らかにし、また北イタリア・ミラノの彫刻家による革新的な表現の試みを、欧州の芸術運動に対し常に敏感であったミラノの文化風土と関連づけて考察するなど、新たな視野を拓くものとして注目されます。さらには、イタリア・ファシズム政権下の記念碑の制作過程を綿密に跡付けて、作者の選定には政権の文化政策が間接的に反映している可能性を示すなど、政治動向と芸術とのかかわりについての論究も大きなテーマのひとつでした。

このように、研究対象は大きく二つに跨りますが、上村氏の美術史研究の方法は、常に、時代を経て変容・進化するイメージの系譜の解明と共に、相互に依存、干渉し合う美術と権力、経済との関係を浮かび上がらせようとするものです。また、作品が置かれる場を重視し、空間を生成する作品相互の関係、そして空間に身をおいて作品を見る人の心の内面に発動する感覚衝動、悦び、快感、恐れといった感情にまで、深く考察を及ぼそうとする点に、大きな特徴を認めることができます。つまり、上村氏は、書物を愛し、新聞や雑誌を実に読みふけり、知の相互関係を究めようとする一方で、人と出会い、旅を続けながら、美術館や都市、すなわち美術の居場所を巡り、作品を見る喜びを味わい、その記憶を愛おしみ、反芻しながら研究を続ける、

感覚知を活かす美術史家であったと思います。ありな書房から公刊された近年の著作、『フレスコ画の身体学—スティーナ礼拝堂の表象空間』（2012年）をはじめとして、感覚のラビュリントゥスと題し1～6まで次々と編集、出版されたシリーズ本は、一つ目の領域での精力的なお仕事であると同時に、美術を空間において味わう中で、見る人の内面に湧き上がる感覚や衝動を掴み取ろうとする、上村氏の情熱の果実に違いありません。

教員として、一同僚としても実に多くを教えていただきました。惜しみなく労力と愛情を注ぐ学生指導、美術館での実習、地域連携の企画や実現までのさまざまな雑務等、こまやかな配慮をもって、ことに処する上村先生の姿は、多くの人々の心に目に刻まれていると確信します。

まことに残念ながら、笑顔でご退職の日を迎える先生を、お送りすることは叶いませんでしたが、人文学の学徒として、人間として、実に豊かで満ちたりた時を過ごされた先生に対し、深く畏敬と哀悼の誠を、そして感謝を、心より捧げたいと思います。

上村清雄先生履歴書

生年月日 1952年10月10日

2017年10月17日 逝去（満65歳）

学 歴

1971年 4月 東京芸術大学美術学部芸術学科入学

1975年 3月 同学科卒業

1975年 4月 東京芸術大学大学院美術研究科（修士課程西洋美術史専攻）
入学

1978年 3月 同研究科修了（芸術学修士）

1981年10月 イタリア政府給費留学生としてイタリア共和国シエナ大学大学院考古学美術史研究科（Scuola di specializzazione in Archeologia e Storia dell'Arte dell'Universita' degli Studi di Siena）入学

1986年11月 同研究科修了（考古学及び美術史修士Specialista in Archeologia e Storia dell'Arte）

職 歴

1987年 1月 群馬県立近代美術館学芸員

1988年 4月 群馬県立近代美術館主任学芸員

1993年 4月 群馬県立近代美術館専門員

1994年 4月 群馬県立近代美術館学芸課長

1996年 4月 群馬県立近代美術館主幹兼学芸課長

2001年 4月 群馬県立近代美術館主任専門員兼学芸課長

2002年 4月 千葉大学文学部助教授（西洋美術史）

2002年 4月 千葉大学大学院文学研究科（修士課程）授業担当（イメージ学）

2006年 4月 千葉大学大学院人文社会科学研究科博士前期課程地域文化形成専攻授業担当（視覚表象論及び同演習）

千葉大学大学院人文社会科学研究科博士後期課程公共研究専

攻授業担当（視覚表象論）

2007年 4月 千葉大学文学部准教授

2010年 4月 千葉大学文学部教授

非常勤講師歴

1978年 4月～1981年 9月 東京芸術大学美術学部非常勤講師

2002年 4月～2002年 9月 東京大学非常勤講師

2004年 4月～2006年 3月 お茶の水女子大学非常勤講師

2008年 4月～ 武蔵野美術大学非常勤講師

その他兼任職歴

国立西洋美術館美術作品購入選考委員（2002～2008、2010～11）

国立西洋美術館美術作品購入評価員（2002～2008）

鹿島美術財団「美術に関する研究」助成候補推薦委員（2002～）

財団法人ポーラ美術振興財団助成事業選考委員（2002～2010）

豊田市美術館美術品収集委員（2002～）

豊田市美術館評価委員（2004～2008）

文化庁買上優秀作品選考委員（2004～2006）

前橋市収蔵美術品専門委員（2007～）

財団法人千葉市教育振興財団評議員（2010～）

『日伊文化研究』編集委員（2014～）

上村清雄先生研究業績目録

A 著書

I 単著書

- 1) 『ラファエッロとジュリオ・ロマーノ―「署名の間」から「プシュケの間」へ―』ありな書房、2008年、総頁数270頁。

II 共著書・共編著書

- 1) 『グレート・アーティスト別冊 盛期ルネサンスの魅力：都市の繁栄と宮廷文化のひろがり』責任編集：森田義之・上村清雄、同朋舎出版、1991年、総頁数144頁。
- 2) 『NHKフィレンツェ・ルネサンス1 夜明け』責任編集：森田義之、日本放送出版協会、1991年（本人担当は「都市を飾る彫刻」37-52頁）。
- 3) 『世界美術大全集 西洋編第11巻 イタリア・ルネサンス1』責任編集：佐々木英也・森田義之、小学館、1992年（本人担当は「ロッピアー族15世紀中期の彫刻」86-94頁、380-382頁）。
- 4) 『盛期ルネサンスの魅力：都市の繁栄と宮廷文化のひろがり』責任編集：森田義之・上村清雄、同朋舎出版、1991年、総頁数144頁。（※1991年の「グレート・アーティスト別冊」シリーズの再刊）
- 5) 『国際シンポジウム記録集 戦争と表象／美術 20世紀以後』長田謙一編、美学出版、2007年（本人担当は「アルトゥーロ・マルティーニとイタリア・ファシズム期の公共彫刻―アオスタ公記念碑をめぐって（序）」361-380頁）。
- 6) 『ルクス・アルティウム 越宏一先生退任記念論文集』越宏一先生退任記念論文集刊行会編、中央公論美術出版、2010年（本人担当は「アントニオ・フェデリーギとシエナのルネサンス」244-253頁）。
- 7) 『知識のイコノグラフィア：文字・書籍・書齋』（感覚のラビュリントゥス1）出佳奈子ほか著、監修解説：上村清雄、ありな書房、2011年、総頁数206頁。

- 8) 『フレスコ画の身体学—システイーナ礼拝堂の表象空間』(イメージの探検学3) ありな書房、2012年、総頁数638頁。
- 9) 『味覚のイコノグラフィア：蜂蜜・授乳・チョコレート』(感覚のラビュリントゥス2) 出佳奈子ほか著、監修解説：上村清雄、ありな書房、2012年、総頁数286頁。
- 10) 『聴覚のイコノグラフィア：楽器・音楽家・音楽文化』(感覚のラビュリントゥス3) 出佳奈子ほか著、監修解説：上村清雄、ありな書房、2013年、総頁数254頁。
- 11) 『触覚のイコノグラフィア：ダフネ・蜥蜴・洗礼者聖ヨハネの舌』(感覚のラビュリントゥス4) 出佳奈子ほか著、監修解説：上村清雄、ありな書房、2014年、総頁数282頁。
- 12) 『嗅覚のイコノグラフィア：フローラの春・夜明けの薔薇・ユディットの血飛沫』(感覚のラビュリントゥス5) 出佳奈子ほか著、監修解説：上村清雄、ありな書房、2014年、総頁数298頁。
- 13) 『視覚のイコノグラフィア：〈トロンブ・ルイユ〉・横たわる美女・闇の発見』(感覚のラビュリントゥス6)、神谷玖方子ほか著、監修：上村清雄、ありな書房、2015年、総頁数326頁。

B 論文

I 学術研究誌への掲載

- 1) 「十五世紀シエナ美術の動向—『彫刻家』ネロッチョ・ディ・ランデイの新しい帰属作品をめぐる—」『日伊文化研究』第26号、1988年、101-121頁。
- 2) 「17世紀フィレンツェ美術の動向—ひろしま美術館の《聖家族》をめぐる—」『群馬県立近代美術館研究紀要』第1号、1992年、1-18頁。
- 3) 「ヨーロッパ美術にあらわれたトルコ人：序説」『歴史学研究』646号、1993年、28-37頁。(査読有)
- 4) 「モンテ・ディ・パスキ・デイ・シエナー—その芸術奨励事業とコレクションの歴史と現在」『日伊文化研究』第32号、1994年、36-47頁。
- 5) 「ミケランジェロの彫刻—パノフスキーの指摘をめぐるひとつのノート」

『武蔵野美術』第107号、1998年、10-15頁。

- 6) 「ヴェナンツォ・クロチェッティの芸術—イタリア彫刻の伝統と革新—」
『ARTLIBRARY』第8号、2007年、11-16頁。
- 7) 「美術館と指定管理者制度—その問題点と意義づけと—」『歴史学研究』
第838号、2008年、14-18、63頁。(査読有)
- 8) 「二〇一六年 展示を考える：「折り鶴」と「赤とんぼ」」『千葉史学』第
69号、2016年11月、1-4頁。

Ⅱ 展覧会カタログへの掲載

- 1) 「ヴェナンツォ・クロチェッティの作品をめぐって：アンナ・インポネ
ンテ、ヴェナンツォ・クロチェッティの芸術 (序)」『ヴェナンツォ・ク
ロチェッティ展』横浜美術館、1988年。
- 2) 「ファシズムの時代—アルトゥーロ・マルティーニとローマー—」『20世紀
イタリア具象彫刻展』群馬県立近代美術館ほか、1988年、225-227頁。
- 3) 「ザッキンと日本」『ザッキン展』画廊文化学院、1991年、6-7頁。
- 4) 「世紀末の画家=版画家」『フランス絵画20世紀への旅立ち—1880年代
後半から1890年代の芸術思潮とその表現』岐阜県美術館・群馬県立近
代美術館、1993年、26-29頁。
- 5) 「ジェイコブ・エプスタインとアフリカ彫刻—造形と収集と— (序)」『ア
フリカ彫刻展 カルロ・モンズィーノ・コレクション』群馬県立近代美
術館ほか、1993年、210-211頁。
- 6) 「絵のなかの女たち—展覧会の構成と内容—」『絵のなかの女たち』、群
馬県立近代美術館、1995年、12-15頁。
- 7) 「19・20世紀ヨーロッパ美術にみる物語の世界—展覧会について—」
『19・20世紀ヨーロッパ美術にみる物語の世界』群馬県立近代美術館、
1996年、11-14頁。
- 8) 「ヴェナンツォ・クロチェッティの芸術 (序)」『ヴェナンツォ・クロ
チェッティ展』群馬県立近代美術館ほか、1998年、20-23頁。
- 9) 「トスカーナ大公国シエナとその芸術【16世紀後半—19世紀】」『シエナ
美術展』群馬県立近代美術館ほか、2000年、25-30頁。

- 10) 『アンジェ美術館展—巨匠たちの奏でる〈雅な宴〉』群馬県立近代美術館、2002年。
- 11) 「ミラノとイタリア近現代彫刻—メロッチェとロッソー」『ミラノ展』千葉市美術館・大阪市立美術館、2005年、23-25頁。
- 12) 「ヴェナントォ・クロチェッティの人と芸術」『クロチェッティ展』鹿児島市立美術館、2006年、3-6頁。
- 13) 「ヴェナントォ・クロチェッティの芸術—過去との対話、未来へのまなざし—」『ヴェナントォ・クロチェッティ 生誕百周年記念展』ヴェナントォ・クロチェッティ財団・箱根彫刻の森美術館・いわき市立美術館、アート・シード、2012年。
- 14) 「フィレンツェとミケランジェロー天才を育んだ芸術都市—」『システイーナ礼拝堂500年祭記念：ミケランジェロー展 天才の軌跡』国立西洋美術館・TBSテレビ、2013年、31-39頁。
- 15) 「ミケランジェローとレオナルド・ダ・ヴィンチ—生涯と芸術をめぐる断章」『レオナルド×ミケランジェロー展』三菱一号館美術館ほか、2017年、18-23頁。

C 作品解説、書評・展覧会評、紹介文など

- 1) Lidia Bianchi e Diega Giunta (a cura di), *Iconografia di S. Caterina da Siena I. L'Immagine*, Roma 1988, n. 162, n. 300, n. 456, n. 485, n. 569, n. 612. (作品解説)
- 2) 「研究動向 シエナの芸術—1980年代のイタリアを中心として—」『地中海学研究』第13号、1990年、119-133頁。
- 3) 「ウルビーノの宮廷美術—シエナとの関連で—」『地中海学会月報』第136号、1991年1月、3頁。
- 4) 「アントニオ・フェデリーギ」『地中海学会月報』第159号、1993年4月、5頁。
- 5) 「フランチェスコ・ディ・ジョルジョとシエナのルネサンス 1450-1500」『地中海学会月報』第162号、1993年9月、7頁。
- 6) 「パノフスキー」『現代思想ピープル101』新書館、1994年、112-113頁。

- 7) 『手塚治虫の聖書物語』全3巻、集英社、1994年。(ギャラリーの作品解説：26項目)
- 8) 「新刊紹介 原研二著『グロテスクの部屋—人工洞窟と書斎のアナログア』(作品社)』『日伊文化研究』第35号、1997年、148-150頁。
- 9) 「イタリア」(共著)『新版ヨーロッパ・キリスト教美術案内2』日本基督教団出版局、1999年、75-120頁、128-132頁、139-144頁。
- 10) 「感覚の喜び、美しいヴェネツィア」『美術手帖』、2001年3月号、208-212頁。
- 11) 「シエナ美術展に寄せて—モンテ・ディ・パスキ・デイ・シエナ銀行およびキージ・サラチーニ・コレクションの歴史と特徴—」『視る』第398号、2001-2年、2-4頁。
- 12) 「レオナルド・ダヴィンチ」「ミケランジェロ」の項目、日本色彩学会編『色彩用語事典』東京大学出版会、2003年。
- 13) 「芸術都市ミラノ」『地中海学会月報』、第285号、2005年12月、5頁。
- 14) 「カミーユ・クローデル—その芸術と小説的な「語り」と—」『府中市美術館だより』第19号、2006年9月、8-9頁。
- 15) 「油絵」「アイコン」「絵画」「カリカチュア」「水彩画」「ステンド・グラス」「石像」「石版画」「彫刻」「銅像」「銅版画」「美術館」の項目、加藤友康編『歴史学事典第14巻【ものとわざ】』弘文堂、2007年。
- 16) 「古代ローマ帝国の遺産展を見て(中)」東京新聞夕刊、2009年11月10日。
- 17) 「書評 アレクサンダー・スタージス(田中純監訳・小澤京子訳)『顔—ナショナル・ギャラリー・ポケット・ガイド』、エリカ・ラングミュア(伊藤博明訳)『天使—ナショナル・ギャラリー・ポケット・ガイド』、デイヴィッド・ボンフォード(金井直訳)『保存—ナショナル・ギャラリー・ポケット・ガイド』(ありな書房)』『図書新聞』第2960号、2010年4月3日。
- 18) 「書評 諸川春樹責任編集『イメージの探検学1 彫刻の解剖学—ドナテッロからカノーヴァへ』(ありな書房)』『図書新聞』第2995号、2010年12月25日。
- 19) 「書評 ピエトロ・ベンボ(仲谷満寿美訳・解説)『アーツロの談論』(あ

- りな書房)』『日伊文化研究』第52号、2014年、110頁。
- 20) 「編集後記」『日伊文化研究』第54号、2016年、116頁。
- 21) 「書評 池野絢子『アルテ・ポーヴェラー戦後イタリアにおける芸術・生・政治』(慶応義塾大学出版会)』『日伊文化研究』第55号、2017年、133頁。
- 22) 「編集後記」『日伊文化研究』第55号、2017年、143頁。

D シンポジウム報告・講演会

- 1) 「シンポジウム〈メダルド・ロッシをめぐって〉」鎌倉画廊、1989年3月28日。
- 2) 「オシップ・ザッキンの芸術」茨城県近代美術館講演会、1998年5月16日。
- 3) 「マジョリカ陶器の魅力—陶と絵との出会い—」東京都庭園美術館講演会、2002年4月20日。
- 4) 「イタリア彫刻について」武蔵野美術大学彫刻科特別講義、2003年12月18日。
- 5) 「イタリア彫刻史」武蔵野美術大学彫刻科特別講義、2004年9月16日、30日、10月7日。
- 6) 「彫刻とは何か」宮城県美術館講演会、2005年3月12日。
- 7) 「芸術都市ミラノ」ブリヂストン美術館講演会、2005年11月5日。
- 8) 「ファシズム期のイタリア彫刻」、国際シンポジウム「戦争と表象／美術」、東京国立博物館平成館講堂、2006年3月5日。
- 9) 「クロチェッティの芸術」鹿児島市立美術館講演会、2006年8月6日。
- 10) 「ヴェナンツォ・クロチェッティとイタリア芸術」イタリア文化会館講演会、2006年9月27日。
- 11) 「ヴィッラ・ファルネジーナ『ブシュケの間』壁画装飾について」『埼玉大学ルネサンス研究会・早大地中海学会研究所共催研究発表会』、学習院女子大学、2007年7月14日。
- 12) 「カミーユ・クローデルとイタリア—伝統と革新」『カミーユ・クローデル展』府中市美術館、2008年7月29日。
- 13) 「アビ・ヴァールブルクの宇宙MVNDVS WARBVRIANVS—『ムネ

モシュネ・アトラス』をめぐって」象文化論学会シンポジウム、東京大学駒場キャンパス学際交流ホール、2012年6月30日。

- 14) 「ヴェナンツォ・クロチェッティと20世紀の芸術」『生誕100周年 ヴェナンツォ・クロチェッティ展』いわき市立美術館、2012年11月11日。
- 15) 「ミケランジェロとフィレンツェ」『システーナ礼拝堂500年祭記念ミケランジェロ展—天才の軌跡』国立西洋美術館、2013年9月7日。
- 16) 「レオナルド×ミケランジェロ展講演会」『レオナルド×ミケランジェロ展』三菱一号館美術館、2017年6月29日。

E 翻訳

I 研究・学術書の翻訳

- 1) ヤーコブ・ローゼンバーク『美術の見かた—傑作の条件—』講談社、1983年（共訳）。
- 2) ジョルジョ・ヴァザーリ『ルネサンス彫刻家・建築家列伝』白水社、1989年（共訳）。
- 3) マリオ・ブラーツ『官能の庭』ありな書房、1992年（共訳）。
- 4) アストーネ・ガスパレット「ヴェネツィアン・グラスへの誘い」『世界ガラス美術全集2 ヨーロッパ』求龍堂、1992年、181-201頁。
- 5) エルウィン・パノフスキー『〈象徴形式〉としての遠近法』哲学書房、1993年（共訳）。
- 6) マウリツィオ・ファジョーロ、アンジェラ・チプリアーニ『ベルニーニ：バロックの誕生』（イタリア・ルネサンスの巨匠たち 30）東京書籍、1995年。
- 7) マリオ・スカリーニ『チェリーニ：マニエリスムへの流れ』（イタリア・ルネサンスの巨匠たち 27）東京書籍、1996年。
- 8) マリオ・ブラーツ『ローマ百景 建築と美術と文学と』ありな書房、1999年（共訳）。
- 9) アビ・ヴァールブルク『フィレンツェ市民文化における古典世界』（ヴァールブルク著作集2）ありな書房、2004年（共訳）。
- 10) マリオ・ブラーツ『ローマ百景Ⅱ 建築と美術と文学と』ありな書房、

2006年(共訳)。(※『ローマ百景 建築と美術と文学と』の増補改訂版)

- 11) アレッサンドロ・パニョーリ「《謙讓の姿勢をとり悲嘆するふたりを伴った十字架上のキリスト》」『イタリアにおける美術作品の保存・修復の思想と歴史—欧米各国との比較から—』(2003~2006年度科学研究費補助金〔基盤研究(B)2〕研究成果報告書、研究代表者：岡田温司)2007年、63-75頁。
- 12) ピーター・M・デイリー編『エンブレムの宇宙：西欧図像学の誕生と発展と精華』ありな書房、2013年、(共訳)。
- 13) エルウィン・パノフスキー『「象徴(シンボル)形式」としての遠近法』ちくま学芸文庫(筑摩書房)、2009年、235頁(共訳)。(※哲学書房より刊行されたものの文庫版)。

II：展覧会カタログ内の翻訳

- 1) 『マリノ・マリーニ展』彫刻の森美術館ほか編、1997年(共訳)。
- 2) 『7人の作家：silent friendship 1960-90's』豊田市美術館編、1999年(共訳)。
- 3) 『ピノッキオ：その誕生から現代まで』高松市美術館ほか、2004年(共訳)。
- 4) 『ミラノ展』千葉市美術館・大阪市立美術館編、2005年(共訳)。

III：映像メディアの日本語版監修

- 1) 『神の手 ミケランジェロ』(BBCアートシリーズ) ティム・ダン製作・監督、2007年。
- 2) 『万物を知ろうとした男 ダ・ヴィンチ(1)』(BBCアートシリーズ) ティム・ダン製作・監督、2007年。
- 3) 『危険な関係 ダ・ヴィンチ(2)』(BBCアートシリーズ) ティム・ダン製作・監督、2007年。

F 科学研究費成果報告書ほか

- 1) 「ジェンティーレ・ダ・ファブリアーノと15世紀シエナ絵画—自然表現を中心として—(序)」『ルネサンスにおける人文主義的自然観』(1991~1992年度科学研究費補助金(A)研究成果報告書、研究代表者：佐藤三夫)

1993年、122-131頁。

- 2) 「『パルナッソス』版画、陶器にみられるラファエロ芸術の受容をめぐる問題（序）」『権力と視覚表象 Ⅲ』（千葉大学大学院人文社会科学研究所研究プロジェクト報告書第67集）2003年、1-12頁。
- 3) 「アルトゥーロ・マルティエーニとイタリア・ファシズム期の公共彫刻—アオスタ公記念碑をめぐる—（序）」『20世紀における戦争と表象・芸術—展示・映像・印刷・プロダクツ—』（2003～2004年度科学研究費補助金基盤研究(B)研究報告書、研究代表者：長田謙一）2005年、144-155頁。
- 4) 『15世紀シエナの彩色木彫研究—絵画表現との関連とその社会的役割』（2003～2004年度科学研究費補助金〔基盤研究(C)〕研究成果報告書）2005年、総頁数40頁。
- 5) 「シエナのルネサンス—アントニオ・フェデリーギ作《聖水盤》を事例として」『ヨーロッパ近現代史における中心=周縁関係の再編』（2005～2007年度科学研究費補助金〔基盤研究(B)〕研究成果報告書、研究代表者：小沢弘明）2008年、21-31頁。
- 6) 「イタリア・ファシズム期の展覧会美術」『芸術受容者の研究—観者、聴衆、観客、読者の鑑賞行動』（2008年度～2010年度科学研究費補助金〔基盤研究(B)〕研究成果報告書、研究代表者：五十殿利治）2010年、12-19頁。
- 7) 「サロメかユディットか—斬首としての自画像」『身体／表象：通文化史的研究』（千葉大学大学院人文社会科学研究所研究プロジェクト報告書第213集）、2011年、35-43頁。
- 8) 『アントニオ・フェデリーギの彫刻：15世紀シエナにおけるドナッテロ芸術の受容』（科学研究費補助金〔基盤研究(C)〕研究成果報告書、2009～2011年度）2012年、総頁数40頁。
- 9) 「ジュリオへの謬見—ラファエッロ 対 ジュリオ・ロマーノ—」および「はじめに」（『空間と表象』上村清雄編、千葉大学大学院人文社会科学研究所研究プロジェクト報告書第259集）、2013年、i-ii、30-38頁。
- 10) 「『壁蟹に咬まれた男の子』—ソフォニスバ・アングイッソラとミケランジェロ・ブオナローティ—」および「はじめに」（『歴史=表象の現在』上村清雄編、千葉大学大学院人文社会科学研究所研究プロジェクト報告

書第279集)、2014年、i-ii、13-25頁。

- 11) 『フランチェスコ・ディ・ジョルジョの芸術—15世紀シエナとウルビーノの芸術交流』(2012~2014年度科学研究費補助金〔基盤研究(C)〕研究成果報告書)、2015年、総頁数40頁。
- 12) 『《化粧するプシュケ》—制作されなかったラファエッロの作品—』および「はじめに」(『歴史=表象の現在Ⅱ—記憶/集積/公開—』上村清雄編、千葉大学大学院人文社会科学研究所研究プロジェクト報告書第294集)、2015年、i-ii、1-11頁。
- 13) 「ユピテルはどこにいる—ティツィアーノとジュリオ・ロマーノ—」および「はじめに」(『歴史=表象の現在Ⅲ 記す/編む/現わす』上村清雄編、千葉大学大学院人文社会科学研究所研究プロジェクト報告書第305集)、2016年、i-ii、9-17頁。
- 14) 「『聖家族』断章:ミケランジェロ、ラファエッロそしてレオナルド・ダ・ヴィンチ」(『翻訳・翻案・伝承:文化接触と交流の総合研究』石井正人編、千葉大学大学院人文社会科学研究所研究プロジェクト報告書第299集)、2016年、20-36頁。
- 15) 「再構成/画像/模写:一五世紀ヴェネツィアの画家ヴィットーレ・カルパッチョ作品:《ラグーン(潟)での狩猟の場面》と《バルコニー上の婦人たち》をめぐる」および「はじめに」(『テキストと引用:原典、異本、翻案』上村清雄編、千葉大学大学院人文社会科学研究所研究プロジェクト報告書第321集)、2017年、i-ii、10-24頁。

G 外部資金の取得状況

I 代表者

2003~2004年度基盤研究(C)「15世紀シエナの彩色木彫研究—絵画表現との関連とその社会的役割—」

2007~2008年度基盤研究(C)「パンドルフォ・ペトルッチ時代のシエナ芸術研究—1500年前後の芸術奨励政策—」

2009~2011年度基盤研究(C)「アントニオ・フェデリーギの彫刻—15世紀シエナにおけるドナテッロ芸術の受容—」

上村清雄先生を送る

2012～2014年度基盤研究(C)「フランチェスコ・ディ・ジョルジヨの芸術—15世紀後半シエナとウルビーノの芸術交流」

Ⅱ 分担者

2003～2004年度基盤研究(B(1))「20世紀における戦争と表象・芸術—展示・映像印刷・プロダクツ—」

2003～2006年度基盤研究(B(2))「イタリアにおける美術作品の保存・修復の思想と歴史—欧米各国との比較から—」

2005～2007年度基盤研究(B)「ヨーロッパ近現代史における中心=周縁関係の再編」

2008～2010年度基盤研究(B)「芸術受容者の研究—観者、聴衆、観客、読者の鑑賞行動—」

Ⅲ 研究協力者

1991～1992年度総合研究(A)「ルネサンスにおける人文主義的自然観」

以上